

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成26年7月4日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職名・学年 博士課程3年

氏名 加藤 隆文

助成の種類	平成25年度・若手研究者在外研究支援・在外研究長期助成	
研究課題名	生態学的な心の理論の、美的領域への応用研究	
受入機関	イギリス・ダラム大学	
渡航期間	平成25年9月23日～平成26年6月25日 (ビザ切替のため12月18日～1月7日に一時帰国)	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	1,900,000円
	使用した助成金額	1,900,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空費・燃料サーチャージ: 310,250円
		宿泊費: 1,200,000円
鉄道賃・バス賃: 389,750円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 助成の柔軟性が高く、非常に助かりました。後輩にも勧めたいと思います。	

成果の概要／加藤隆文

私は、2013年9月下旬から2014年6月下旬までの間、イングランド北東部のダラム大学にて在外研究を行いました。特筆すべき成果としては下記があげられると考えます。

(1) イギリス式のアカデミック・ライティングの訓練を積むことができました。受入研究者であった Nick Zangwill 教授は、私が英語で書いた論文を添削して下さいました。また、ダラム大学の English Language Centre でアカデミック・ライティングを教えている Terri Edwards 氏もまた、たびたび添削指導をして下さいました。こうした経験を通して、IELTS や TOEFL 等の語学試験の作文対策とは根本的に異なるレベルで、学術論文にふさわしい論述展開方法や単語の選び方を習得できたと考えます。また、今回の英国滞在によって、英語で論文を執筆した場合にプルーフ・リーディングをしてくれるイギリス人の研究者仲間を、数人持つことができました。これらのことにより、英語媒体において自身の研究を発表するに際して、言語面で気後れすることは無くなりました。私の行っている研究の最前線は英語圏にあるため、英語で研究成果を発表することで研究に対するフィードバックを得られる可能性は格段に上がります。今後とも、英語での学会発表や論文出版を積極的に行ってゆきたいと考えています。

(2) ダラム大学哲学科において、大学院生向けの講義や演習に参加しました。また、大学院生が主体となって運営している美学の研究会とプラグマティズムの研究会に、それぞれ、継続的に参加しました。その他、在英中にダラム大学で開催された国際会議や、チョムスキーの招聘講演などに出席しました。これらの機会は、英語圏の哲学や美学の最前線の議論に触れるとともに、実際に英語を使ってこうした議論に参加する機会となりました。こうした機会を通して、私は次のような実感と自信を得ることができました。つまり、心の哲学や分析美学の分野では、議論の中心地は確かに英語圏ではあるのですが、私自身が日本で勉強を続けてきた経験のうちからも十分に最前線の議論に貢献できるということ、そして、日本での研究活動は、場合によっては英語圏内の議論だけでは見えてこない洞察をも含んでいる場合があるということを感じました。こうした意味でも、外国語を習得して研究の最前線とされている現場に飛び込むことは有意義であると実感しました。また、イギリスの哲学研究者間には、

多少言葉が拙かったとしても内容を伴う発言には真摯に耳を傾けるという文化が定着しており、私自身、上記の機会を自身の研鑽のために積極的に活用しやすく感じました。最終的には、こうした機会の積み重ねを経て、私は一時間程度の研究発表を哲学科内で行うことができ、質疑応答において非常に有意義なフィードバックを得られました。

(3) プラグマティズム研究、特にチャールズ・パース研究の世界的な第一人者である、シェフィールド大学の **Christopher Hookway** 教授の知遇を得ることができました。彼はパース著作の出版事業やパース学会においても中心人物として活躍しており、パース研究に関する議論を交わす相手としては理想的と言えます。私は、自身の執筆した文章や研究計画をもとに彼との話し合いを重ねました。彼との議論を経て既に一本の論文が書き上がっており、これは適切な英語媒体の学術誌に投稿する予定です。さらに彼からは、パース研究の最前線の情報に常にアクセスできるようにするための方法や、パース研究が特に盛んに行われている諸学会に関する情報などもご教示頂きました。また、今後とも執筆した原稿を読んでフィードバックをいただけるという関係を築いています。この彼との関係は、私の研究において重要な部分を占めるパース研究を今後進めてゆく上で、とりわけ有益なものになると考えられます。

以上の三点が、今回の在外研究の成果として特筆すべき事であるように思われます。いずれにおいても、ダラム大学関係者やあるいはダラムの市井の人びと（例えばよく通ったパブの店員さんに至るまで）が、私の研究活動に非常に好意的に、親切に接して下さいました。ダラムという街が大学の街であるということを実感でき、幸せな日々を過ごせたと感じています。ここに、英国で関わった全ての皆さんに感謝を表明しておきたいと思います。さらに、こうした有意義な在外研究を可能にしてくれた京都大学教育研究振興財団に、篤く御礼申し上げます。